

山の夜

山口耀久



山で泊る小屋は、すこしぐらい汚くて粗末でも、気持のよい夜を過ごさせてくれれば、それでよい。近ごろは立派な設備が整っていて、下界並みの上等な食事まで頼める山小屋もあるようだが、そういう高級な泊り場は、私はあんまり縁がない。

要は安く泊れて、落ち着いた眠りが得られること。それに、少々の贅沢が許されるなら、寝る前にいくらかの充ち足りた時間が過ごせること。親切な小屋の管理人からランプの灯の下で山の話聞かせてもらった静かな夜のことや、夕食のあとでストーブにありながら、友達と気ままなお喋りをした愉しい夜のことか思い出される。

管理人のいない避難小屋のような粗末な小屋でも、屋根と壁板と床がしっかりしてさえいれば、それで一夜の泊りになんの不足もない。同宿者のいない一人きりの夜はさびしいが、寂しさも山登りの味わいのひとつである。私の山登りには、むしろそんな無人の小屋での思い出のほうが多い。

夏のシーズンには、山小屋は混むし、なにかと気を遣わなければならぬのも嫌なので、同行の友達がいるときは、大抵はテントを携行した山旅になる。寝具、炊事用具、

食糧と荷物が増えるのはありがたいが、そのかわり、一日の行程が終って目的地に張ったテントの中には、狭いけれども、薄い布地で仕切られた自分たちだけの、くつろいだ自由の空間がある。

今では、ほとんどの山でテントの設営地が指定されていて、どこにでも張れるというわけにはいかないが、それでも人のあまり入らない深い山の谷間なら、平地や河原がみつければ、好きな所が泊り場を選べる。薪になる流木の多い谷なら、そこで原始的な焚火の夜がたのしめるだろう。北海道の日高の沢や、南アルプスの深い谷での、そんな豪勢な夜のこと忘れられない。

思えばいろいろな、山での夜がこれまでにあった。雪が深かったために日暮れまでに小屋に着くことができず、あるいは雪の樹木帯で道を失ってしまったたりして、雪の穴に身をちぢめて辛いビバークをしたこともあった。狭い岩棚でザイルに結ばれたまま迎えた厳しい岩壁の夜もあったし、下山の途中でライトの電池が切れてしまい、岩陰にうずくまって空腹をこらえながら過ごした、いまましい夜もあった。あとにな

れば、どれもみな愉快な思い出だが、そのときは二度とご免だと思わされた夜がいくつもあったことは事実である。

近ごろは、どんな山でも途中で夜になっても困らないように、その支度だけはしっかりして出かける。予定するにしろ、しないにしろ、山で過ごす夜はやはり愉しいほうがいい。ちよつとしたご馳走を用意して、どこかの山に野宿の一夜を過ごしに出かけてみたくなることがある。月夜の晩に気の合った友達と山を歩いてみようかと、その山をあれこれ考えたりすることがある。